モーツァルト巡礼ーその４

K.518 水谷 康男

半年のご無沙汰です。前回は、K.80 弦楽四重奏曲第１番ト長調で終わりましたので、今回は K.81 から始まります。K.81 は交響曲ニ長調、1771 年 4 月ローマで作曲されたものですが、交響曲の通し番号はつけられていません（のちに 44 番がつけられましたが）。それは初期の出版カタログには父レオポルドの作と記されていたからで、現在ではモーツァルト本人の作とされています。　アレグロ、アンダンテ、アレグロ・モルトの 3 楽章で、演奏時間 10 分程度で、とてもさわやかで、生き生きとした曲でまさにイタリア・ローマで解放された気持ちにあふれています。

ここで、モーツァルトの交響曲について復習・予習していきます。

以下　交響曲番号、調性、ケッヘル番号、副題、作曲年代、作曲地

第１番	変ホ長調	K.16	1764 または 1765	ロンドン

第 2，3 番（K.17，K.18）は、モーツァルトの作品ではないことが判明しており、続くは

第 4 番	ニ長調	K.19	1765	ロンドン
番号無し	ヘ長調	K.19a	1765	ロンドン
第 5 番	変ロ長調	K.22	1765	ハーグ
第 6 番	ヘ長調	K.43	1767	ウィーン
第 7 番	ニ長調	K.45	1767	ウィーン、
新ランバッハ交響曲	ト長調（K.無し）		1765	ランバッハ　(旧ランバッハ交響曲は父の作品)
第 55 番	変ロ長調	K.45b	1768	ウィーン
第 8 番	ニ長調	K.48	1768	ウィーン
第 9 番	ハ長調	K.73	1769	ウィーン
第 10 番	ト長調	K.74	1770	ミラノ
第 42 番	ヘ長調	K.75	1771	ザルツブルク
第 43 番	ヘ長調	K.76	1766 または 1767	ウィーンまたはザルツブルク
第 44 番	ニ長調	K.81	1770	ローマ

とここまでで、14 曲になります。その後についても調べていきます。

第 11 番	ニ長調	K.84	1770	ボローニャ
第 45 番	ニ長調	K.95	1770	ローマ
第 46 番	ハ長調	K.96	1771	ミラノ
第 47 番	ニ長調	K.97	1770	ローマ
第 12 番	ト長調	K.110	1771	ザルツブルク
第 13 番	ホ長調	K.112	1771	ミラノ
第 14 番	イ長調	K.114	1771	ザルツブルク
第 15 番	ト長調	K.124	1772	ザルツブルク
第 16 番	ハ長調	K.128	1772	ザルツブルク
第 17 番	ト長調	K.129	1772	ザルツブルク
第 18 番	ヘ長調	K.130	1772	ザルツブルク
第 19 番	変ホ長調	K.132	1772	ザルツブルク
第 20 番	ニ長調	K.133	1772	ザルツブルク
第 50 番	ニ長調	K.141a(K.161&K.163)	1772	ザルツブルク
第 48 番	ニ長調	K.111&K.120/111a	1771	ミラノ
第 51 番	ニ長調	K.196&K.121/207a	1775	ミュンヘン・ザルツブルク
第 52 番	ハ長調	K.208&K.102/233c	1775	ザルツブルク
第 21 番	イ長調	K.134	1772	ザルツブルク
第 22 番	ハ長調	K.162	1773	ミラノ・ウィーン
第 23 番	ニ長調	K.181/162b	1773	ザルツブルク
第 24 番	変ロ長調	K.182/173dA	1773	ザルツブルク
第 25 番	ト短調	K.183/173dB	1773	ザルツブルク

ここでついに有名な最初のト短調交響曲が登場しました。

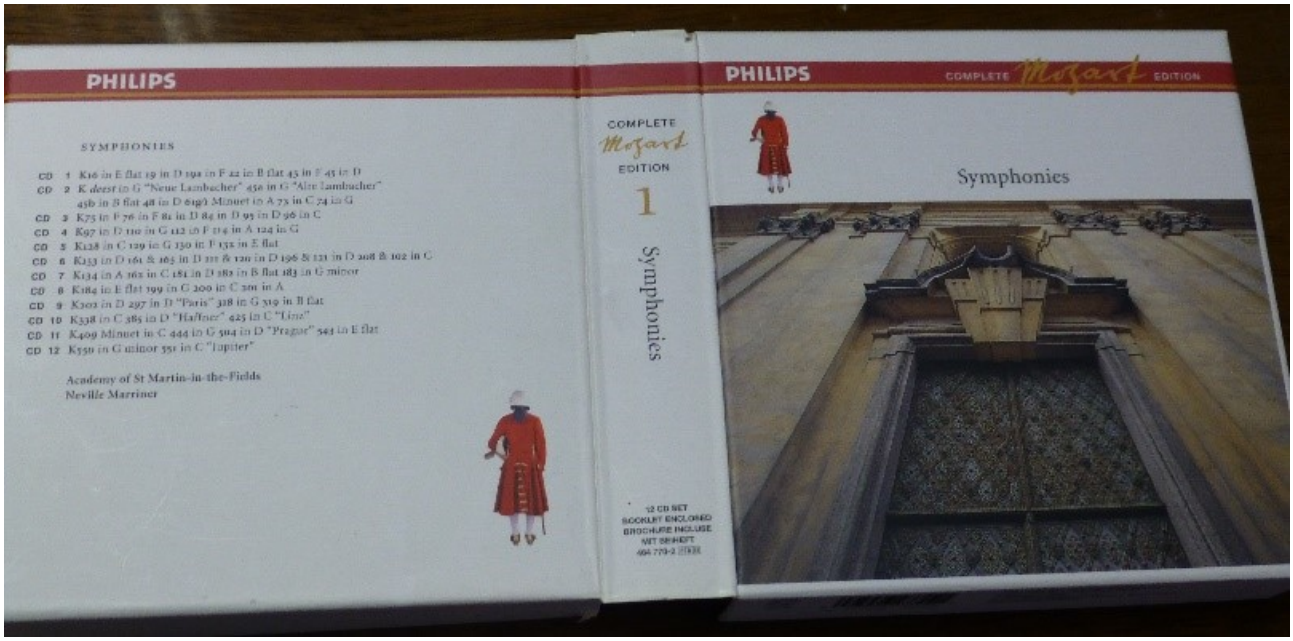
第 26 番	変ホ長調	K.184/161a	1773	ザルツブルク
第 27 番	ト長調	K.199/161b	1773	ザルツブルク
第 28 番	ハ長調	K.200/189K.	1774	ザルツブルク
第 29 番	イ長調	K.201/186a	1774	ザルツブルク
第 30 番	ニ長調	K.202/186b	1774	ザルツブルク
第 31 番	ニ長調	K.297/300a「パリ」	1778	パリ
第 32 番	ト長調	K.318	1779	ザルツブルク
第 33 番	変ロ長調	K.319	1779	ザルツブルク
第 34 番	ハ長調	K.338	1780	ザルツブルク
第 35 番	ニ長調	K.385 「ハフナー」	1782	ウィーン
第 36 番	ハ長調	K.425 「リンツ」	1783	リンツ
第 37 番	ト長調	K.444/425a（序奏部分のみ　残る 3 楽章はミハエル・ハイドン作曲）		
			1783	リンツ
第 38 番	ニ長調	K.504 「プラハ」	1786	ウィーン
第 39 番	変ホ長調	K.543	1788	ウィーン
第 40 番	ト短調	K.550	1788	ウィーン※

※クラリネット付きの版と無しの版

第 41 番	ハ長調	K.551「ジュピター」	1788	ウィーン

と、以上全 51 曲となります。これからの研究によっては、この数もきっと増えたり減ったりするのでしょうが、24 年間ですから、1 年に 2 曲のペースで作曲されたのです。個々の曲を調べると、それぞれの事情によりいくつかに分類されるのではないかと思いますが、今は寄り道して、K.81 以降 K.551 までを、K.番号順を変更して交響曲を続けて聴くことにいたします。

以下、交響曲に絞って巡礼を続けます。主にネヴィル・マリナー指揮アカデミー・セント・マーティン・イン・ザ・フィールドによる CD 全集の方が収録曲数が充実しているので、主として、こちらの録音順に進めていくことにしました。



交響曲第 11 番ニ長調 K.84 は、1770 年 2 月にミラノで書きかけて、ローマ・ナポリへの旅で中断して、同年 7 月にボローニャで完成したもので、明るく屈託のないアレグロ、アンダンテ、アレグロの 3 楽章、10 分余りの佳曲です。

交響曲第 45 番ニ長調 K.95 は、1770 年 4 月ローマで作曲され、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、アレグロの 4 楽章で、これまた 10 分余りの小品です。第 11 番同様明るく清々しい逸品です。その中で第 3 楽章メヌエットのトリオ部（ニ短調）の愁いを帯びた旋律はとても 14 歳の少年の手になる曲とは思えません。これだけでもモーツァルトの才能に驚嘆するばかりです。

交響曲第 46 番ハ長調 K.96 は、1771 年 10～11 月にミラノで作曲されています。オーボエとホルンだけでなく第 1 楽章・第 4 楽章では、トランペットにティンパニも加わり、ドラマチックな響きが聴こえます。アレグロ、

アンダンテ、メヌエット、アレグロ・モルトの４楽章からなる１２分余りの作品です。

交響曲第 47 番ニ長調 K.97 は、1770 年４月にローマで作曲されたといわれています。アレグロ、アンダンテ、メヌエット、プレストの４楽章からなる 10 分ほどの作品です。イタリア・ローマで春を待ち焦がれる明快な佳曲です。

交響曲第 12 番ト長調 K.１１０は、1771 年 7 月ザルツブルクで作曲されました。アレグロ、アンダンテ、メヌエット、アレグロの４楽章からなる１6 分ほどの作品です。

交響曲第 13 番ホ長調 K.112 は、1771 年 11 月ミラノで作曲され、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、モルト･アレグロの４楽章からなる 14 分ほどの作品です。

交響曲第 14 番イ長調 K.114 は、1771 年 12 月末にザルツブルクで作曲され、アレグロ・モデラート、アンダンテ、メヌエット、モルト・アレグロの４楽章からなる 18 分ほどの作品ですが、私の聴いているマリナー指揮の CD では、最初に書かれて抹消された、メヌエットの原型も４楽章の後に付属しています。

1772 年には、ザルツブルクで第 15 番から第 21 番と、第 50 番の８曲が作曲されています。３年続けたイタリア・ミラノ旅行の最後の年で、最後の 50 番については、第１・２楽章はザルツブルクで、第３楽章はナポリで作曲されています。音楽の傾向は、前年までと同じですが、より奔放さを増し、内容も豊かになってきました。

交響曲第 15 番ト長調 K.124 は、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、プレストの４楽章。演奏時間１３分程。

交響曲第 16 番ハ長調 K.128 は、アレグロ・マエストーソ、アンダンテ・グラツィオーソ、アレグロの３楽章。演奏時間 11 分。第２楽章は弦五部＊だけの演奏で、対位法的手法により、弦同士の対話が素敵です。　＊このころの弦五部は、チェロとコントラバスは同じ声部になっており、正確にはヴァイオリンⅠ、ヴァイオリンⅡ、ヴィオラ、チェロ&コントラバスの４声部、しかも通奏低音としてチェンバロが入ります。ただ、曲によってはヴィオラが２部に分かれての弦５部という曲もあります。例交響曲第６番など。ヴァイオリンⅠ、Ⅱ、ヴィオラ、チェロ、コントラバスと現在のような弦５部となるのは、交響曲第 13 番が最初です。他には、第 35 番、39 番、41 番なのです。しかも分かれて演奏するのはごく一部で、ほとんどは同じ声部を演奏しています。

交響曲第 17 番ト長調 K.129 は、アレグロ、アンダンテ、アレグロの３楽章、演奏時間 12 分。前の曲にもみられるように、今までの曲と較べると音楽のスケール（編成はいずれも典型的なオーボエとホルンに弦五部なのだが）が一段と大きくなり、ドラマティックに盛り上がる。こんなところにも天才モーツァルトの成長ぶりがうかがわれて、喜ばしい。

交響曲第 18 番ヘ長調 K.130 は、アレグロ、アンダンティーノ・グラツィオーソ、メヌエット、アレグロの４楽章、演奏時間 20 分。ここへきて演奏時間 20 分に及ぶ壮大なスケールへと進化してきました。もちろん規模だけでなく音楽的内容もとても充実してきました。楽器編成は、弦５部の他は、オーボエでなくフルート２本とホルン（しかも２本でなく C2 本、F2 本計）４本です。特に壮大な第４楽章は、目を見張るものがあります。

交響曲第 19 番変ホ長調 K.132 は、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、アレグロの４楽章、演奏時間 20 分。第２楽章は、後日入れ替えられており、初めに書いたアンダンテ・グラツィオーソの別稿（最初の原稿）が、第４楽章の後に残されている。この CD 全集にも収録されており、ベームの録音にも終曲の後にこの曲が収録されています。岩城宏之・オーケストラアンサンブル金沢の全曲演奏会シリーズでは、果たしてどうだったのでしょうか？ 私は、このシリーズは、終わりの数回行っただけでしたので、まったく記憶がありません。

交響曲第 20 番ニ長調 K.133 は、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、アレグロの４楽章、演奏時間 22 分。第 19 番と同時に作曲されたもので、このニ長調という調性は後期の名作（「パリ」「ハフナー」「プラハ」）が多い。弦５部の他に、オーボエ、ホルンの他にトランペットも加わり、第２楽章ではこれらが休む代わりにフルートが入ってセレナードの趣となります。

交響曲第 50 番ニ長調 K.141a(K.161&K.163) は、アレグロ・モデラート、アンダンテ、プレストの３楽章、演奏時間８分。

第 48 番ニ長調 K.111&K.120/111a は、アレグロ・モデラート、アンダンテ、プレストの３楽章、6 分余りです。

第 51 番ニ長調 K.196&K.121/207a は、アレグロ・モルト、アンダンテ・グラツィオーソ、アレグロの３楽章 8 分余りの曲です。

第５２番ハ長調 K.208&K.102/233c は、モルト・アレグロ、アンダンティーノ、プレスト･アッサイの３楽章、11 分ほどの曲です。

交響曲第 21 番イ長調 K.134 は、アレグロ、アンダンテ、メヌエット、アレグロの４楽章、演奏時間 20 分。

ここまできて、16 歳にしていよいよ天才が技量を培って、その才能を開花してきます。K.134 に続いて、K.135 音楽劇「ルチオ・シルラ」、そして初期のデヴェルティメントの傑作 K.136,K.137, K.138 へと続いていくのです。

（続く）